

人文科学研究科

【2025 年度 大学評価総評】

2025 年度自己点検・評価シート、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2025 年度中期目標・年度目標達成状況報告書によれば、目標達成状況はきわめて良好であった。各専攻について国際化に応じた多様な開講科目・コースワーク・教育制度についての検討を着実に進めた。本研究科は、様々な異なった学問分野が集まった研究科であり、各分野の事情を反映しつつ研究支援に関する統合的で多角的な情報共有の仕組み作りに取り組んだ。また、オンライン授業を積極的に導入し、生産的な活用を実現した。上記に加え国際化への対応として留学生の受験しやすい環境を整備するなど限られた人材、資源を有効に活用し、研究・教育の質的な向上に向けた効果的、効率的な取り組みが成果を上げ、改善につながっている。教員組織は、多様な専門領域にわたったバランスのとれたものとなっており、院生や留学生の抱える問題についても教員間で情報共有が行われている。各専攻の研究成果もさまざまな媒体を通じて広く社会に発信している。現行の方向でのいっそうの進化、発展を期待したい。

【2025 年度 自己点検・評価結果】

I. 改善・向上の取り組み

(1) 2024 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2024 年度大学評価結果総評】(参考)

2024 年度自己点検・評価シート、2023 年度中期目標・年度目標達成状況報告書、2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書を見る限り、目標達成状況は良好であった。特にコースワークの科目群、教育体制・制度についての検討については、中期目標達成に向けて着実に取り組んでいる。引き続き検討していただき、さらにどのように学習成果を評価するのか、その検証についても期待したい。学問分野によってかなり事情の異なる多彩な研究科という特殊事情に対して、自覚的に取り組みを進めていることがわかる。それはコロナ後の多彩かつ柔軟な対応にも表れているように見える。多彩な専門分野を深く掘り下げる研究者間の連携を追求してきたことも重要であり、今後の発展が期待できる。

【2024 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2024 年度大学評価委員会の評価は総じて高評価であり、我々の努力が認められたことをまず喜びとしたい。しかし、これに慢心することなく絶えず点検し、よりよい教育・研究を目指していきたい。人文科学研究科の「学問分野によってかなり事情の異なる多彩な研究科という特殊事情に対して、自覚的に取り組みを進めてきた」ことが認められたのは喜ばしいが、人文科学をめぐる現代的な課題を見過ごすことなく、これに積極的に取り組んでいく柔軟な姿勢を失わないように心がけたい。

コロナ感染症の流行期を経て、対面して議論することの重要性が再認識されるとともにオンラインの効用も認識され、それぞれの利点を活かした教育のあり方が模索されている。それにより高度な教育・研究を目指すとともに、その学修成果の評価、検証方法についてさらに検討、試行を進めたい。

人文科学研究科には6つの専攻があるだけでなく、各専攻も多彩な専門の研究者によって構成されている。学問慣習や制度の相違も大きい、6専攻の兼任教員に加え、さらにこれ以外の3名の教員からなる国際日本学インスティテュートは専攻を越えてともに学生を指導しあい交流する機会となっている。これまでも専攻主任会議を中心にして、相互の交流やコミュニケーションに努めており、これを継続し、さらに深化させていきたい。

(2) 改善・向上の取り組み(教育課程およびその内容、教育方法)

新しく策定したアセスメント・ポリシーに基づき、今後、ディプロマ・ポリシーに示した学習成果をどのように把握しますか。また、その結果を研究科としてどのように活用しますか。

＜対応する大学基準：学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価していること。＞

《今後の計画》

専攻主任会議および研究科教授会において、ディプロマ・ポリシーの2（一定以上の論理的思考力を

有し、それをもってさまざまな課題を発見し解決することができる)に示した学習成果が身についているかどうか、複数の測定方法を用いて多元的に確認する予定である。

【学会発表・論文発表実績】

2025 年度中の在学生の学会発表・論文発表実績を調査し、それをもとに研究内容を整理し、簡潔に論理的に説明する能力を身につけているかを確認する。

【修士論文・博士論文構想発表会の実施状況】

各学生が研究目的や研究内容、研究方法について論理的に他者に説明する能力を身につけているかを確認する機会としての修士・博士論文構想発表会などが各専攻でどのように実施されているかを確認する。

教育課程およびその内容、教育方法について、研究科として過去 4 年間（2021 年度～2024 年度）の中で特に改善・向上に向けて取り組んだ事例について、①～⑩の項目から《改善した項目》を選択し（レ点チェック）、その詳細について《改善内容》《改善した結果良かった点・課題》を記入してください。

《対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》

事例

《改善した項目》
(複数選択可)

- ☐ ①開講時期、開講頻度、授業時間等
- ✓ ②授業科目の内容（目標、内容、開設授業科目数、授業科目の統廃合）
- ✓ ③授業科目の関係（各科目間の関係、ナンバリング、カリキュラムマップ、カリキュラムツリー、履修系統図等）
- ✓ ④教育方法（授業の形態、授業方法等）
- ☐ ⑤評価基準、評価方法
- ✓ ⑥学生の履修（配当年次等）
- ✓ ⑦地域社会・国際社会・産業界等の社会との接続
- ✓ ⑧学習支援（単位の実質化のための取り組み、各種相談・サポート、学生の主体的な学習を促す取り組み）
- ✓ ⑨留学、フィールドワーク等プログラムの充実
- ☐ ⑩その他

《改善内容》

※理由を含めて記入してください。

②各専攻において国際的・複眼的観点から、開講科目・コースワーク・教育制度についての検討、確認を行っている。2024 年度には英文学専攻ではカリキュラム改訂による学則変更を行い、地理学専攻では教職課程の科目追加を行った。2025 年度にはそれらに向けた検証がなされる予定である。心理学専攻では 2025 年度にカリキュラム改訂を予定している。他の専攻でも検討を進めており、史学専攻では昨今のアーキビストに関する社会的需要に対応するため、アーキビスト養成プログラムの内容を精査し、拡充に向けて検討を行った。③上記のカリキュラム変更に伴って各専攻でカリキュラムマップ・カリキュラムツリーも改訂した。④各専攻においてコロナ禍の経験をふまえてオンラインツールの活用が進められ、資料の事前配付や授業外の議論などで授業時間の有効活用につなげている。哲学専攻ではオンライン授業の柔軟な利用を積極的に導入することで、遠隔地で勤務する教員を夏季集中講義の講師として依頼することが可能となり、依頼可能な講師の幅が大きく広がった。地理学専攻では社会人が多く在籍していることから、ハイフレックスによる夜間開講や週末開講、サマーセッションやオータムセッションでの集中講義を実施した。英文学専攻、史学専攻でも社会人学生の多い状況に鑑み、一部の科目をオンラインで実施、または対面を基本とする授業であっても適宜オンラインを併用するハイフレックス方式を導入している。⑥学部と大学院の連携を強め、かつ相互の学習効果を高めるため、英文学専攻では 2025 年度より修士課程の院生が一部の学部科目を履修可能にするカリキュラム改革を行った。また、すでに哲学専攻や英文学専攻・史学専攻・心理学専攻では修士科目を学部生が履修可能であったが、このうち史学専攻では科目の拡充を実現させた。⑦各専攻でそれぞれの学問的特性に応じ、情報発信による社会貢献や社会連携を行っており、ほとんどの専攻で社会人を積極的に受け入れている。日本文学専攻では生涯学習のニーズの高い専門分野の教員が外部で講座・講演等を積極的に行い、情報発信をしている。史学専攻では、社会連携のあり方に関連して、アーキビスト養成プログラムの拡充に取り組むべく準備を進めている。⑧英文学専攻・国際日本学インスティテュートでは 2021 年度より奨学金情報のリストを大学院生に提供し、経済的理由で就学・研究が困難にならないよう配慮している。心理学専攻では集団指導体制を取っており、指導教員以外の教員や院生から研究に関するフィードバックを得る機会として大学院研究発表会を年に 3 回実施してい

る。対面およびビデオ会議システムを利用したリアルタイムの発表会だけでなく、オンラインチャットツールを活用することで発表会終了後も質疑応答が継続するように配慮している。これを含めすべての専攻・インスティテュートにおいて修士論文・博士論文の中間報告会を実施、指導教員以外の教員からの助言や学生相互の質疑応答を経て研鑽する機会としている。⑨哲学専攻では大学院生と大学院出身者を母体とする学内学会「法政哲学会」に学部学生の出席・聴講を促した結果、多くの学部生が大会に積極的に参加した。

《改善した結果良かった点・課題》

良かった点は以下の通り。②アーカイブズ学に関わるカリキュラム改革に向けての議論が深まり、アーキビスト養成プログラムの拡充に向けての道筋が定まった（史学専攻）。専修免許状の取得要件が緩和された（地理学専攻）。④対面授業への出席が困難な大学院生の利便性が高まった（英文学専攻・史学専攻・地理学専攻）。遠隔地に住む教員にも兼任講師を依頼することで、幅広い授業の選択肢を確保している（哲学専攻）。⑥大学院生と大学院進学を見据える学部生の交流が生まれ、お互いの学習意欲の向上につながった（史学専攻）。⑧発表会等でチャットツールを利用することで時間の制約を受けることなく教員・学生間の意見交換ができるようになり、研究の質の向上につながっている（心理学専攻）。⑨大学院生と学部生との交流の可能性を増すとともに、相互の研究・勉学の活性化を図ることができた（哲学専攻）。

（３）改善・向上の取り組み（教員・教員組織）

教員・教員組織について、研究科として特に「特色」として挙げられるもの、もしくは「課題」として今後改善に取り組んでいきたいものを《項目》の中から選択し、《内容》を記入してください。

・教員組織に対する取り組み※

※主に、教員が担う責任の内容、科目適合性の学内での判断、各教員の担当授業科目、担当授業時間の把握・管理（複数の所属、他大学・企業等との兼務教員について業務状況や教育効果含む）について

・教員の教育能力の向上、教育課程や授業方法の開発及び改善につながる組織的な取り組みとその成果

・授業における指導補助者（TA 等）の活用に対する取り組み

《対応する大学基準：教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を安定的にかつ十全に展開できる教員組織を編制し、学習成果の達成につながる教育の実現や大学として目指す研究上の成果につなげていること。》

《対応する大学基準：教育研究活動等の改善・向上、活性化につながる取り組みを組織的かつ多面的に実施し、教員の資質向上につなげていること。》

《対応する大学基準：教員組織に関わる事項を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。》

《特色または課題》

特色

《項目》

教員のバランス

専攻を超えた交流

授業における指導補助者（TA 等）の活用に対する取り組み

業務負担の公平化、省力化

《内容》

各専攻において多様な専門領域にわたった、バランスのとれた教員組織であることを確認している。哲学専攻や日本文学専攻・史学専攻・心理学専攻においては、後任人事にあたっては専門性の多様性に加え、教員の年齢構成やジェンダーについて配慮した選考を行い、24年には哲学専攻に初めて女性教員が採用された。

国際日本学インスティテュートにおける月例の合同演習（修士および博士論文中間報告会含む）・論文審査は、専攻の枠を越えてそれぞれの学識や考え方、教育方法を交わせる貴重な機会となっており、教員の教育能力の向上につながっている。

TAを活用することで、学生に手厚い指導体制を確保でき、学生の能力・姿勢・態度等の向上に繋がっている。TAに準じて留学生に対するチューターの確保において、とくに留学生が多数を占める国際日本学インスティテュートの学生に対して専攻の枠を越えて協力しあう体制ができており、有効に機能している。

国際日本学インスティテュートでは、一部の教員に業務の負担がかからないように、仕事の配分の見直しを行った。哲学専攻では大学院入試問題の作成にあたり、それまで問題作成担当者間で紙ベースで確認・とりまとめをしていたものを、デスクネットを通じた電子ファイルによる確認、とりまとめに変更した。これによって入試問題の作成過程での管理・セキュリティが向上したほか、教員間での直接の受け渡し等がなくなりファイル修正等も迅速にできるなど、作業自体も効率化した。

Ⅱ. 全学的な自己点検・評価結果より見出された重点的な評価項目

（１）自由を生き抜く実践知を体現する取り組み

研究科における「実践知」を体現する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 ≪対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫ ≪対応する大学基準：社会連携・社会貢献活動の状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

(2) オンライン教育の取り組み

オンライン授業は「2024 年度以降の授業編成における留意点について（報告）」(2023 年度第 4 回研究科長会議資料 No. 2) に沿って、適した授業科目に用いられ、その有効性や教育効果を確認し、改善・向上を図っていますか。 ≪対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S (さらに改善した又は新たに取り組んだ)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫ 哲学専攻ではオンライン授業の柔軟な利用を積極的に導入することで、遠隔地で勤務する教員を夏季集中講義の講師として依頼することができ、結果として依頼可能な講師の選択肢を大幅に増加させたことで、集中講義の内容をより幅広く充実させることが可能になった。		

(3) 学生の声を活かした取り組み

研究科レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。 ≪対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		
授業レベルにおいて、学生の声を活かした改善・向上を図っていますか。 ≪対応する大学基準：教育課程及びその内容、教育方法について定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	A (概ね従来通りである又は特に問題ない)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

(4) 定員管理の適正化

研究科の在籍学生数を適正に維持する取り組みについて、改善・向上を図っていますか。 ≪対応する大学基準：学生の受け入れに関わる状況を定期的に点検・評価し、改善・向上に向けて取り組んでいること。≫	S. さらに改善した又は新たに取り組んだ A. 概ね従来通りである又は特に問題ない B. 更なる改善が必要な点がある又は改善を困難とする要因がある。	S (さらに改善した又は新たに取り組んだ)
上記項目について【SまたはB】と回答した場合は、その内容について記述してください。 Sの場合は、改善した取り組みや新たな取り組み、成果を記述してください。 Bの場合は、改善計画又は改善を困難とする要因について記述してください。		
≪内容≫		

英文学専攻・史学専攻においては、大学院と学部の共通科目を新たに設定したり、拡充する方向で見直したりと、専門教育のさらなる推進を図っている。さらに地理学専攻と心理学専攻では学内入試などを実施するなどして、学部生の大学院進学を促している。

日本文学専攻や地理学専攻・国際日本学インスティテュートでは留学生が受験しやすいような環境を整えた。具体的には、特に日本文学専攻・国際日本学インスティテュートでは、中国 5 大学（四川外国語大学・重慶師範大学・福州大学・福建師範大学・西南民族大学）との協定による特別入試を行い、多様な学生の受け入れを積極的に実施している。中国 5 大学での現地説明会もコロナ禍で中断していたものの 23 年度に再開し、25 年度には 7 名の優秀な留学生を受け入れることができた。国際日本学インスティテュートには定員に対する充足比率が低めの地理学専攻の学生も在籍しており、定員充足に寄与している。また、地理学専攻では、外国人入試において日本語試験を廃止し、日本語外部試験を導入した。さらに学内入試において、通信教育課程在学生の出願条件を変更した。

Ⅲ. 2024 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準		教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標		専攻分野の高度な研究とともに、国際的、複眼的視野を養成できるよう、教育体制・制度について検討し、教育課程と教育内容の適正化を不断に促進する。
年度目標		前年度に引き続き、各専攻・インスティテュートの科目群を精査し、国際的、複眼的教育の可能性について議論を活性化する。
達成指標		各専攻・インスティテュートに導入されたコースワークの科目群、教育体制・制度について国際的、複眼的視野の観点から検証し、教授会で情報を共有する。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	各専攻において国際的、複眼的観点から開講科目、コースワーク、教育制度について検討・確認している。2024 年度では、英文学専攻や地理学専攻ではカリキュラム改訂が行われ、学則変更を行った。2025 年度にはそれに向けた検証が成される予定である。また、2025 年度に向けて哲学専攻や日本文学専攻、史学専攻では検討を深めている。さらに、心理学専攻では 2025 年度にカリキュラム改訂を行う予定である。第 10 回専攻主任会議と第 10 回教授会において、「2024 年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第 10 回専攻主任会議議事録、第 10 回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	各専攻ともカリキュラム改訂の実施および検証、あるいは実施に向けての検討が進められており、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言	—
評価基準		教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標		オンラインと対面教育を活用する時代において、教育方法に関する適切さを検討するとともに、研究倫理教育のより深い浸透を図る。
年度目標		コロナ禍後における教育方法の多様化のなかで、オンラインと対面のそれぞれの長所を見極め適切に教育方法を差配する。またそれに伴う研究倫理教育のありかたを検討する。
達成指標		オンラインないし対面による教育に関して学生への聞き取り調査などを行い、その特色・効用などを検証する。また研究倫理教育に関して学生の意識の向上を確認する。それらの情報を逐次教授会で共有する。
年 度 末	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	全専攻で研究倫理教育の意味について、オリエンテーションで説明し、また eL CoRE を利用して研修を実施し、受講した院生からは修了証を提出するように求めること

報告		を通じて、研究科全体で実質的な研究倫理の意識向上の機会を設定した。その後も修士論文・博士論文の中間発表等の機会に、先行研究の適切な引用の仕方などを実践的に指導している。また、教育方法に関しても専攻毎に様々な方法でデータを収集して、その実践に役立てている。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	研究倫理教育の重要性が高まっているなか、各専攻とも複数の教育の機会を設けて取り組んでいることは高く評価され達成指標は十分に充足されたと認められる。ただし、コロナ禍も落ち着き、オンライン教育については縮小傾向にあるので、来年度は中期目標の一定の見直しも視野に入ってくると思われる。
	改善のための提言	—
評価基準		教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標		修士と博士後期の両課程の大学院生が若手研究者としてのより良質な研究成果を生む方策を検討する。
年度目標		引き続き、若手研究者としての大学院生の育成のあり方についての議論を深化させる。
達成指標		大学院生の機関誌への投稿、種々の研究支援への申請の促進について、各専攻・インスティテュートで検討し、教授会で情報を共有する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	大学院生に対する様々な研究支援に関する情報は、各専攻毎に工夫した連絡手段を用いながら速やかに行っている。それぞれの専攻において、研究発表会等を開催するなどして、大学院生の研究活動を促すとともに進捗状況を専攻教員間で共有している。また、研究指導の過程で、各分野の学術雑誌や法政大学内の各学会で刊行している機関誌等への投稿を促していることを確認した。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	年度目標に基づき、各専攻において大学院生の研究発表会等を開催し、指導を行うとともに、機関誌等への投稿を促し、専攻会議を通じて各種支援の紹介も行っている。専攻会議ではこうした情報を共有し、検討しており、教授会において上記について報告・確認されているので、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言	—
評価基準		学生の受け入れ
中期目標		海外および社会に開かれた大学院教育のさらなる実現を図るべく、留学生・社会人および内部進学希望者の受け入れのためのあり方について検討し、その教育上の環境整備について議論する。
年度目標		引き続き、留学生・社会人の積極的な受け入れとともに、内部進学希望者の拡大と学部教育とのスムーズな接続のために、制度的・教育的な環境整備について議論を深化させる。
達成指標		大学院と学部の連携・接続スキームの可能性について議論を開始する。また、コロナ禍後の留学生受け入れ体制を整備する。上記の点について教授会で情報を共有する。

年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	各専攻において、大学院と学部共通科目を新たに設定したり拡充方向で見直すなどの検討を行っている。哲学専攻や英文学専攻、史学専攻、心理学専攻ではすでに修士科目を学部生が履修可能であり、専門教育のさらなる推進を図っている。また、史学専攻では2025年度より修士課程の履修可能な科目の拡大を行う。英文学専攻では2025年度より修士課程の院生が一部の学部科目を履修可能にするカリキュラム改革を行った。英文学専攻や地理学専攻、心理学専攻では、学内入試などを実施して、大学院進学を促している。日本文学専攻や地理学専攻では留学生が受験しやすいような環境を整えている。特に、日本文学専攻では、中国5大学（四川外国語大学・重慶師範大学・福州大学・福建師範大学・西南民族大学）との協定による特別入試を行うなど、多様な学生の受け入れを積極的に実施している。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	年度目標に基づき、各専攻において大学院科目の学部生履修を可能にするなど学部と大学院を連携・接続を検討あるいは推進し、また社会人入試、内部進学入試、外国人入試など多様な制度によって学生の受け入れを行っている。教授会において上記について報告・確認され、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言	—
評価基準		教員・教員組織
中期目標		修士論文・博士論文の質の向上のための研究・教育指導体制を視野に入れて、各専攻・インスティテュートの教員組織の多様性のあり方について議論を深める。
年度目標		教員構成の多様性と教育の質の向上・維持の関係について議論を活性化する。また、専任のみならず兼任講師の役割も含めて多様化を図る。
達成指標		各専攻・インスティテュートにおける専任教員（兼任教員を含む）のみならず、兼任教員も含めた教員組織の多様性を精査し、情報共有して、人文科学研究科として多様性についての認識を深め、教授会で情報を共有する。
年度 末 報 告	教授会執行部による点検・評価	
	自己評価	S
	理由	各専攻において多様な専門領域にわたった、バランスのとれた教員組織であることを確認した。また、哲学専攻や史学専攻、心理学専攻においては、後任人事にあたっては専門性の多様性に加え、教員の年齢構成やジェンダーについて配慮した選考を行っている。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策	—
	質保証委員会による点検・評価	
	所見	各専攻とも、バランスの取れた教員構成を達成すべく継続的に努めており、後任人事の選考などを通じて目標を達成している。また教授会での情報共有もなされており、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言	—
評価基準		学生支援
中期目標		学生の生活面・精神面での支援の適切なあり方を継続的に検討する。

年度目標	引き続き、学生の言語・研究・生活・精神面で必要な支援や体制について議論を深化させる。
達成指標	学生は言語（外国人留学生における日本語など）、研究・生活・精神面でどのような問題点、課題、困難を感じているか等について、情報収集の上問題点を抽出し、教授会で情報共有する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価
	自己評価 S
	理由 各専攻において院生の研究・生活・精神面でのトラブルや懸念点について教員間で情報を共有し対処策・予防策を講じていることを確認した。とりわけ留学生に対しては相談、アドバイス等の支援を行い、チューター制度の活用を促進することも含め専攻内で情報共有していることを確認した。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策 —
	質保証委員会による点検・評価
	所見 各専攻とも大学院生の学習面や生活面での種々の困難に対応すべく配慮し、教授会での情報共有もなされており、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言 —
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	人文科学研究科の研究・教育の成果と社会貢献・社会連携のあり方・方法を議論し、模索する。
年度目標	人文科学研究科の研究・教育の成果をいかに社会に還元するか、その意義や方法や社会への貢献、社会との連携について議論を活性化する。
達成指標	人文科学の学問的特性を生かした社会貢献・社会連携の可能性について議論を開始し、各専攻・インスティテュートが現在行っている社会貢献・社会連携について、教授会で情報を共有する。
年度末報告	教授会執行部による点検・評価
	自己評価 S
	理由 各専攻でそれぞれの学問的特性に応じ、情報発信による社会貢献や社会連携を行っている。たとえば哲学専攻や英文学専攻、地理学専攻では、社会人を積極的に受け入れ、日本文学専攻では、多様な専門性をもつ教員が外部で講演等を行い、情報発信をしている。史学専攻では、社会連携のあり方に関連して、アーキビスト養成プログラムの拡充に取り組むべく準備を進めている。地理学では本学学術研究データベースで、心理学ではさらに法政心理学会年報で情報発信や共有を行っている。第10回専攻主任会議と第10回教授会において、「2024年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第10回専攻主任会議議事録、第10回人文科学研究科教授会議事録）。
	改善策 —
	質保証委員会による点検・評価
	所見 各専攻とも、それぞれの特性に応じた仕方で種々の社会貢献を積極的に行っており、また研究科内でそれに関する情報の共有もなされており、達成指標は十分に充足されたと認められる。
	改善のための提言 —
【重点目標】 コロナ後における教育方法の多様化のなかでオンラインと対面のそれぞれの長所を見極め適切に教育方法を差配する。またそれに伴う研究倫理教育のありかたを検討する。	

【目標を達成するための施策等】	
オンライン・対面での教育に関する学生への聞き取りなどを行い、そのそれぞれの特色と効果を見極め、実践的な教育活動に役立てる、また研究倫理教育に関する学生の意識の向上に関して検討する。そしてそれらについての情報を教授会で共有する。	
【年度目標達成状況総括】	
重点目標とした「教育課程・学習成果【教育方法に関すること】」に関しては、研究倫理教育の意味についてオリエンテーション等で説明し、eL CoRE を利用した研修と受講修了証の提出を求めるほか、修士・博士論文の中間発表等の機会にも研究指導・倫理教育を行うなど、研究科全体で実質的な研究倫理の意識向上の機会を設定した。また、教育方法に関しても専攻毎に様々な方法でデータを収集して、その実践に役立てていることを確認した。年度目標の達成状況については、第 10 回専攻主任会議で議事とし、各専攻から意見聴取を行い情報を共有した。さらに、第 10 回教授会において、「2024 年度 中期目標・年度目標達成状況報告シート_専攻別一覧」で報告、確認した（第 10 回専攻主任会議議事録、第 10 回人文科学研究科教授会議事録）。このように 2024 年度目標は達成されたと総括した。	

IV. 2025 年度中期目標・年度目標

評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
中期目標	専攻分野の高度な研究とともに、国際的、複眼的視野を養成できるよう、教育体制・制度について検討し、教育課程と教育内容の適正化を不断に促進する。
年度目標	前年度に引き続き、各専攻・インスティテュートの科目群を精査し、国際的、複眼的教育の可能性についてさらに議論を深める。
達成指標	各専攻で行われたカリキュラム改革について、国際的、複眼的視野の観点から専攻主任会議で議論し、教授会で議論を深めるための情報を共有する。
評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
中期目標	オンラインと対面教育を活用する時代において、教育方法に関する適切さを検討するとともに、研究倫理教育のより深い浸透を図る。
年度目標	教育方法の多様化のなかで、オンラインと対面のそれぞれの長所をさらに見極め適切に教育方法を差配する。引き続き、研究倫理意識の向上を図る。
達成指標	オンラインで開講している授業およびその特色、効用などについて専攻主任会議で情報を共有し、あわせて各専門分野ごとに対面の長所も見極める。引き続き研究倫理教育に関する周知を徹底し、研究倫理意識の向上の資料とすべく受講状況を確認する。
評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
中期目標	修士と博士後期の両課程の院生が若手研究者としてのより良質な研究成果を生む方策を検討する。
年度目標	大学院生の研究成果発表のあり方について状況を把握し、さらなる可能性を探る。
達成指標	在学生の 2025 年度の研究発表・論文掲載状況を調査し、専攻主任会議でその状況を把握し議論する。さらに大学院生に対して今後の研究発表の場について周知して投稿を促すべく、学際的な場も含めて学会や研究機関などにおける研究発表・投稿機会について各専攻・インスティテュート内で情報を共有する。
評価基準	学生の受け入れ
中期目標	海外および社会に開かれた大学院教育のさらなる実現を図るべく、留学生・社会人および内部進学希望者の受け入れのためのあり方について検討し、その教育上の環境整備について議論する。
年度目標	引き続き、留学生・社会人の積極的な受け入れとともに、内部進学希望者の拡大と学部教育とのスムーズな接続のために、制度的・教育的な環境整備について議論を深化させてきたことを鑑み、この間の改革の効果を検証する。
達成指標	各専攻の入試改革をふまえ、留学生・社会人、および内部進学を含む一般入試それぞれの受験者、入学者数の増減を把握する。
評価基準	教員・教員組織

中期目標	修士論文・博士論文の質の向上のための研究・教育指導体制を視野に入れて、各専攻・インスティテュートの教員組織の多様性のあり方について議論を深める。
年度目標	教員構成の多様性と教育の質の向上・維持の関係について、専任のみならず兼任講師の役割も含めて教授会構成員の認識を深める。とりわけ学生数が多く専門も多岐にわたる国際日本学インスティテュートの教員増に努める。
達成指標	各専攻・インスティテュートにおける専任教員（兼任教員を含む）のみならず、兼任教員も含めた教員組織の多様性について、人文科学研究科として認識を深め、教授会で情報を共有し、議論する。また、国際日本学インスティテュートに新たに加わる教員を確保する、あるいは確保の見通しを立てる。
評価基準	学生支援
中期目標	学生の生活面・精神面での支援の適切なあり方を継続的に検討する。
年度目標	引き続き、学生の言語・研究・生活・精神面で必要な支援や体制について議論を深化させる。
達成指標	各専攻における留学生を含む学生支援の深化の方向性について専攻主任会議で情報を共有する。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	人文科学研究科の研究・教育の成果と社会貢献・社会連携のあり方・方法を議論し、模索する。
年度目標	人文科学研究科の研究・教育の成果をいかに社会に還元するか、その意義や方法や社会への貢献、社会との連携について議論を活性化する。
達成指標	人文科学の学問的特性を生かした社会貢献・社会連携の可能性について議論を開始し、各専攻・インスティテュートが現在行っている社会貢献・社会連携について、教授会で情報を共有し議論の活性化に向けた準備を進める。
【重点目標】 大学院生の研究成果発表のあり方について状況を把握し、さらなる可能性を探る。 【目標を達成するための施策等】 夏までに各専攻・インスティテュートにおいて大学院生に推奨される学会・研究機関の研究発表大会および論文投稿先について情報をまとめて院生に提供する。1月をめやすとして2025年度の研究発表・論文掲載状況についてまとめ、2月の専攻主任会議で年度の状況を把握し、さらなる可能性を議論する。	